チェルノブイリ・ツアーに参加して

青山　晴江

たんぽぽ舎メルマガに案内の出ていた「チェルノブイリ原発視察＆民間交流ツアー（NPO法人・食品と暮らしの安全基金主催）」に郡山市の黒田節子さんと共に参加してきました。原発事故26年後のウクライナに日本の未来を見る気持ちでキエフに降り立ちました。印象に残ったことをかいつまんで報告させていただきます。

筆者

小児がん病棟

9月25日　キエフ市内の小児がん病棟。医師の説明では最近は病気の種類がいろいろ出てきている、西欧に比べて生存率成果が遅れている。病室には大きな目でじっとこちらを見る子どもたちと心配そうにそばで付き添う家族が。

子どもの医療支援を行っている団体「ザポルーカ」では女性たちが大きな力になっていた。遠方から治療に来る子どもと親のための無料宿泊施設「家族の家」でお昼をごちそうになり話を聞く。家を借りるとき家主や近所に「がんはうつる、怖い」と言われたことも。また、地方の若い医師に小児がんの知識を学んでもらう活動もしているそうだ。広い庭で闘病中の子どもたちと遊んだ。

26日　午前　胎児の放射能被害を研究している医師の講演を聴く。胎児の甲状腺が脳に対して放射能の影響を与えバランスの取れない知能になっているのではないか、という調査結果を踏まえた話を必死にメモを取りながら聞いた。

午後　事故当時2号機制御室で緊急処理をした元技術幹部の話からは、真っ暗な制御室の緊迫した様子が伝わって来た。普段は放射能を外に出してはならぬ発電所に、その日は外からの大量の放射能を入れないように努力しなければならなかった（小出裕章氏が以前、ご自分の研究室について同じようなことを話されていたのを思い出しながら聞いていた）。フクシマ事故の本当の規模を日本政府はまだ隠しているのではないかと話され、友人たちの死について語ろうとするとき、目を閉じて沈黙が訪れた。語ることのできぬ深い闇がそこにあった。

チェルノブイリ原発

27日　チェルノブイリ原発へ。解体作業中の2号機制御室へ、長い廊下をたどって行く。白衣の作業員さんがたくさん。敷地内で3100人が働く。制御室のトップ技術者の方は、福島の事故を知ったとき「またチェルノブイリが起きてしまった！」と思われたそうだ。今年から観光場所となった4号炉前ではまだ高線量。石棺といっても配管や煙突が見え、組まれた足場で作業の人が働いていて、一昔前の京葉道路脇の工場群のような外観。この中に犠牲になった運転員さんの亡骸が26年以上閉じ込められたままでいる。隣の敷地には工事中の新シェルターのカーブした骨組みが見えた。15年に設置予定だそうだ。原発排水路には、鳩も飲み込むという巨大な鯰が泳いでいた。

プリピャチ市のゴーストタウンでは遊園地の観覧車が錆付いて私たちを迎える。線量の高い苔を踏まないよう注意されながら、かつてモダンだった原発の町を歩く。バスで原発作業員食堂へ遅い昼食を取りに戻る。途中で赤い森が見えた。事故後に降った雨で、わず

錆びついた観覧車

廃村の朽ちかけた家

か3時間で枯れてしまった松林である。廃村がある。壊されて土を被され土饅頭のようになった家々のお墓。隣村では白樺林のなかに朽ちかけた家。赤レンガの壁に緑色に塗られた木の窓枠。誰もいないのにまだそこには、人が暮らしていた温かさが漂う。遥か地平線までどこまでも続く無人の放射能の大平原。有刺鉄線に囲まれた30㎞圏内の荒れ野に夕陽が落ちていく。この現実は過去？　それとも原発のあるすべての地の未来？　検問所の脇に「チェルノブイリを忘れないで」と英語などで書かれた色とりどりのリボンを結んだ丸い輪があった。

28日　オブルチ市郊外の小学校2校で子どもたちの体の具合を聞き、給食の食材を放射能測定検査に出す。「頭や足が痛いひとは？」の質問に手を挙げる子どもたちが多くみられた。自給自足の美しい村で孫世代にも放射能の影響が現れているのだろうか。鶏、ダチョウ、ヤギ、七面鳥などが囲いの中で走っている校庭と木造校舎。16歳の少女が哀しい旋律の「チェルノブイリ」を歌い、女性の先生たちが「カチューシャ」に似た歌を大声量で披露してくれて、ウオッカつきの盛りだくさんのお昼でもてなしてくださる。子どもたちの笑顔が忘れられない温かな学校だった。

29日　強制移住の村を訪ねる。秋空の下で、素朴な明るい別荘村のような雰囲気の村で、その日はお祭りだった。移住者の方の家で「チェルノブイリ人」と地元住人に差別される日々や、がんや心臓病などの闘病中にも、生きる希望を失わずに暮らしてきたことなどお話を伺う。高齢のお父さんが亡くなる前に、しきりに元の村に帰りたがり、車の音がすると、「あれに乗って帰るんだね」と。最期にはわからなくなって、天井を見上げ「ああ帰ってきた。俺の村、自分の家にやっと帰ってきた。」といわれて亡くなったそうだ。原発事故が長年にわたり人々に強いるひどさを肌で感じ、子どもの避難・移住どころか全くの無策で福島を放棄し、更なる被曝を強いている日本政府のひどさをあらためて思った。

（あおやま・はるえ／詩人、本会会員。写真提供は「食品と暮らしの安全基金」）

第2版　電子版「市民の意見（1号～129号）」を発売中です

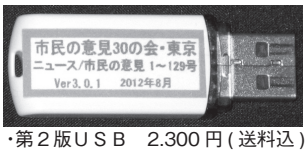
「電子版・市民の意見」（1号～100号）を頒布中でしたが、今回129号までを収めた第2版をリリースしました。1988年から2011年までの23年間の市民運動の記録がぎっしりと詰まっています。ぜひご活用ください。

電子版の検索機能で「原発」をキーワードに、7，000件の記事から検索してみると、『原発と原爆は同じもの　柳田真（2000年2月58号）』から、『米国の核戦略と日本の原発　浅井基文（2011年12月129号）』まで、41件がヒットします。

58号の柳田真さんの記事は、1999年9月の東海村JOCの臨界事故とその後の対応について批判した「日本の原子力はまるでダメ」「専門家、国、科技庁、電力会社のお粗末さ、ひどさ、ウソ宣伝」「原発を止める運動に全力を」などの言葉が並んでいて、福島第二原発事故を予見する内容です。

・購入、お問合せは事務局・橋本までどうぞ

・第1版USBのバージョンアップ用CD　300円（送料込）



・第2版USB　2.300円（送料込）